

ささえあい



毎年開かれる大学祭では「住ま研」学生部が、住まいをテーマにした劇を上演する

「共生未来へ」

<2>

住まいのヒント

私は血液透析を受けており、今年で二十五年になります。二十五年前、新潟市の信楽園病院での透析初日。使用ロッカーを決めていただくときに「ロッカーのかぎはかけないでください。透析中は何かと考えています。そんな折にフロレンに亡くなるのが、そのま

ま入院ということが起こりますから」と申し渡されました。当時の最長透析歴は十年。今も透析七・九年で半数の方が亡くなっています。初期の透析治療は保険が適用されず、高額治療費の支払いのため多くの患者は田畑を売り、それが尽きると自ら命を絶しました。「金の切れ目は命の切れ目」と言われた時代でした。現在は全国で約二十万人の透析患者が保険適用を受け社会に支えられています。

「住まい研」設立

自立への住環境研究

護の定義に出合いました。看護の実践者として、また偉大な思想家として今に影響を与えているナイチンゲールです。その定義は「新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え食

要したりします。「すべての人の自立生活が可能なように、その人に合った最適な住環境を研究し、提供すること」を目的に「快適住まい環境研究会」が一九九六年に設立されました。

事内容を適切に選択し適切に与えること」としています。食事以外はすべて住環境整備なのです。健康と住環境の大事な関係は昔も今も変わりません。むしろ高齢社会が急速に進行し、さらにその重要性は高まっています。住環境によって在宅療養が不可能であったり、寝たきりになったり、あるいは多大な介護力を要したりします。

趣意に同調してくれた教員は老人看護学の水戸助教授(現在山梨看護大学教授)、解剖生理学の関谷教授、さらに山際(現在新潟県庁)・西脇両助手の四人でした。その後学生が何人かで「住ま研学生部」を立ち上げられました。今は「雷問題」に取り組む安田講師(現在上教大大学院)や住宅改修相談を受ける佐々木教授、小林(恵)講師、斎藤助手、さらに設計・建築の専門家として新井市のH興業専務や上越市のM一級建築士など、総勢八十余人の研究員になりました。

活動としては、毎年住環境分野の第一線で活躍されている先生をお招きしてフォーラムを開催。今年は五月八日に予定しています。他にニュースの発行、施設見学会などを続けています。

(杉田 収・県立看護短大教授) (上越市)